

<資 料>

肉用牛の改良促進調査研究
—アニマルモデルによる育種価の推定—

片岡博行・中山裕貴

Studies on Improvement of Japanese Black Cattle
— Presumption of Breeding Values by Animal Models —

Hiroyuki KATAOKA, Hiroki NAKAYAMA

要 約

岡山県の和牛（黒毛和種）における産肉形質の遺伝的な改良を推進するため、BLUP法アニマルモデルによる育種価を推定した。この第32・33回育種価は、種雄牛の選抜及び優良雌牛の選定・保留などの和牛改良の基礎資料として、畜産関係機関及び畜産農家へフィードバックを行った。以下、第33回育種価について報告する。

1. 分析に用いた枝肉成績は23,986件であった。
2. 育種価判定頭数は、種雄牛920頭、繁殖雌牛19,025頭であった。
3. 育種価が判明した繁殖雌牛のうち供用中と考えられるものは、4,155頭であった。

キーワード：牛 和牛 黒毛和種 育種価 BLUP法 アニマルモデル

緒 言

岡山県の和牛（黒毛和種）における産肉形質の遺伝的な改良を推進するため、BLUP法アニマルモデルによる育種価を推定し、種雄牛の選抜及び優良雌牛の選定・保留などの基礎資料として、畜産関係機関及び畜産農家へフィードバックを行った。以下、最新の育種価である第33回について報告する。

材料及び方法

1 分析材料

分析に供した枝肉データは、昭和63年12月から平成23年1月までに収集された枝肉データ24,140件のうち、病牛と考えられるものや肥育農家が不明なもの154件を除いた23,986件を用いた。なお、枝肉データ収集場所は岡山県営食肉地方卸売市場ほか49カ所の食肉市場に出荷されたものとした。

2 分析対象形質

分析を行った枝肉形質は、枝肉重量、ロース芯面積、バラの厚さ、皮下脂肪厚、歩留基準値及び脂肪交雑基準値の6形質とした。

3 遺伝的パラメーター及び育種価の推定に用いた数学的モデル

対象集団の遺伝的パラメーター及び育種価については、BLUP法アニマルモデル（社団法人全国和牛登録協会作製）により推定した。

なお、数字モデルは次に示したとおりである。

$$Y_{ijklm} = \mu + S_i + N_j + H_k + A_{ijklm} + b_1(X_{ijklm} - \bar{X}) + b_2(X_{ijklm} - \bar{X})^2 + b_3(R_{ijklm} - \bar{R}) + E_{ijklm}$$

Y_{ijklm} : 枝肉成績の観測値

μ : 全平均（基準年=昭和50年）

S_i : 性の効果（母数効果）

N_j : 出荷年次の効果（母数効果）

H_k : 肥育者の効果（変数効果）

A_{ijklm} : 育種価

b_1, b_2 : 出荷月齢に対する1次及び2次偏回帰係数

X_{ijklm} : 出荷月齢

\bar{X} : 出荷月齢の算術平均

b_3 : 近交係数に対する1次回帰係数

R_{ijklm} : 近交係数

\bar{R} : 近交係数の算術平均

E_{ijklm} : 残差

結果及び考察

1 枝肉データの構成及び基本的統計数値

収集した枝肉データを出荷年別にまとめ、それぞれについて、枝肉データ数及び出荷月齢、枝肉重量、ロース芯面積、バラの厚さ、皮下脂肪厚、歩留基準値、BMS No の平均値を表1に示した。

枝肉データの構成をみると73.7%が去勢牛のものであるが、近年は、去勢牛が約7割、雌が3割となっている。また、分析した枝肉形質について、近年、出荷月齢が短くなる傾向が見られたがH21、22年の出荷はやや月齢が長くな

っている。枝肉重量、BMS No 及びバラの厚さの改善が見られるが、皮下脂肪はやや厚くなっている。性別では、雌の出荷月齢が去勢に比べ約1.4ヵ月遅くなっているにもかかわらず、全ての形質で去勢が雌より優れていた。

さらに、枝肉データから血統を5代祖まで遡った時出現する血縁データは、19,945件(種雄牛920件、繁殖雌牛19,025件)であったことから、この件数が、今回の育種価判明頭数である(表2)。

表1 出荷年別枝肉データの平均値

出荷年		S63~H16	17	18	19	20	21	22	23	総計
去勢	枝肉データ数	3,131	411	471	486	439	607	741	29	6,315
	出荷月齢平均値	29.71	29.90	29.99	29.71	29.67	29.78	30.00	30.55	29.78
	枝肉重量平均値	398.04	393.69	404.00	410.82	426.14	431.15	432.25	439.77	408.53
	ロース芯面積平均値	50.87	52.51	52.08	51.35	52.35	53.50	52.67	52.79	51.68
	バラ厚平均値	6.75	7.04	7.08	6.93	7.14	7.31	7.27	7.53	6.95
	皮下脂肪厚平均値	2.73	2.69	2.88	2.87	2.92	2.94	2.94	3.12	2.81
	歩留基準値平均値	73.08	73.59	73.26	72.99	73.04	73.22	73.06	72.99	73.13
	BMS No 平均値	4.65	5.42	5.19	4.97	5.34	5.43	5.36	5.52	4.97
雌	枝肉データ数	9,482	1,162	1,102	1,152	1,387	1,657	1,615	62	17,671
	出荷月齢平均値	28.37	28.27	28.35	28.29	28.48	28.74	29.07	28.68	28.47
	枝肉重量平均値	437.22	433.63	445.17	459.90	469.03	477.52	483.81	494.22	449.66
	ロース芯面積平均値	51.61	53.45	52.95	52.74	53.82	54.33	55.10	54.95	52.63
	バラ厚平均値	6.96	7.19	7.27	7.31	7.46	7.48	7.49	7.66	7.16
	皮下脂肪厚平均値	2.41	2.31	2.44	2.57	2.60	2.56	2.50	2.75	2.46
	歩留基準値平均値	73.11	73.65	73.38	73.08	73.19	73.20	73.27	73.01	73.19
	BMS No 平均値	4.87	5.56	5.54	5.51	5.94	5.80	5.93	5.66	5.27
全体	枝肉データ数	12,664	1,573	1,573	1,638	1,826	2,264	2,356	91	23,986
	出荷月齢平均値	28.71	28.70	28.84	28.71	28.77	29.02	29.36	29.28	28.81
	枝肉重量平均値	427.53	423.19	432.84	445.34	458.72	465.08	467.59	476.86	438.83
	ロース芯面積平均値	51.41	53.21	52.69	52.33	53.47	54.11	54.33	54.26	52.38
	バラ厚平均値	6.91	7.15	7.21	7.20	7.38	7.44	7.42	7.62	7.10
	皮下脂肪厚平均値	2.49	2.41	2.57	2.66	2.68	2.66	2.64	2.87	2.55
	歩留基準値平均値	73.11	73.64	73.34	73.05	73.16	73.21	73.20	73.01	73.17
	BMS No 平均値	4.82	5.53	5.43	5.35	5.80	5.70	5.75	5.62	5.19

表2 血縁データ数(育種価判明頭数) (件)

区分	データ件数	
枝肉データ数	23,986	
血縁データ数 (育種価判明頭数)	種雄牛	920
	繁殖雌牛	19,025 (供用中 4,155)
	計	19,945

2 産肉形質の遺伝率

枝肉データから推定された産肉形質の遺伝率を図1に示した。

これによると、いずれの産肉形質についても30%以上の高い遺伝率を示した。中でも皮下脂肪厚、歩留基準値及び脂肪交雑基準値の遺伝率は特に高く、50%を越える値であった。

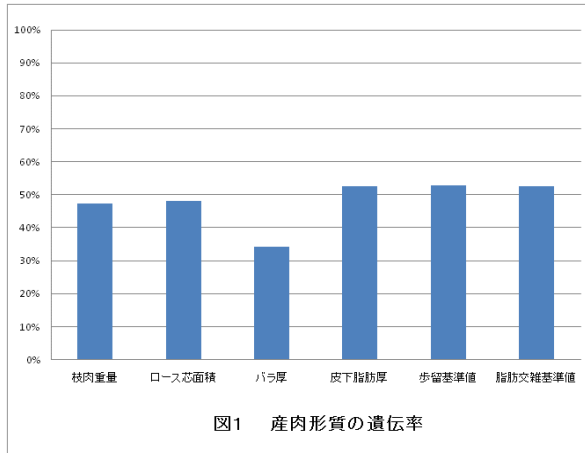


図1 産肉形質の遺伝率

各産肉形質における育種価から推定される繁殖雌牛の期待枝肉成績の分布を図3～8に示した。

全ての形質で評価全体よりも供用中のものがより好ましい産肉能力分布を示している。この傾向は脂肪交雑育種価で特に顕著であり、繁殖農家において、脂肪交雑育種価を中心とした選抜・保留が積極的におこなわれていることが推測される。

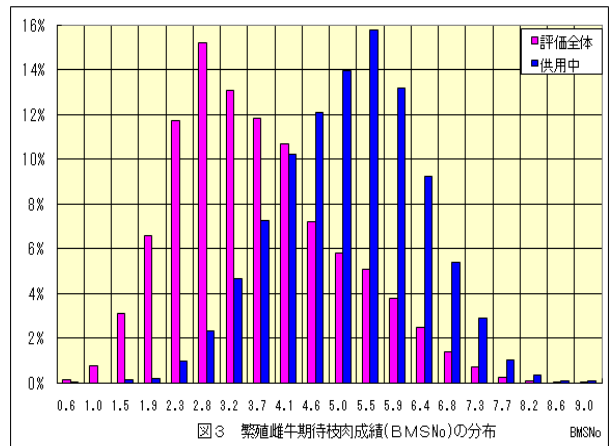


図3 繁殖雌牛期待枝肉成績(BMSNo)の分布

3 育種価の概要

(1) 育種価判明状況

育種価判明頭数を表2に示した。種雄牛920頭、繁殖雌牛19,025頭の育種価が判明した。なお、繁殖雌牛のうち過去3年間に分娩が確認されたものを「供用中」とし、その頭数は4,155頭であった。平成22年8月1日現在の岡山県の繁殖雌牛頭数は5,654頭であるので、判明率は73.5%と推定した。この判明率は全国でもトップレベルにある。

また、繁殖雌牛の生まれ年別の育種価評価頭数を図2に示した。



図2 育種価評価頭数の年次推移

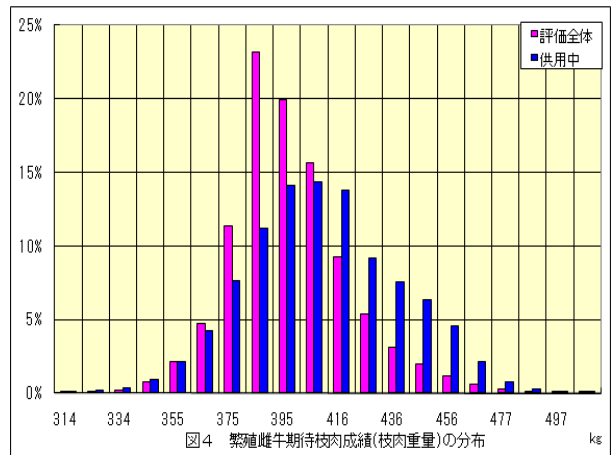


図4 繁殖雌牛期待枝肉成績(枝肉重量)の分布

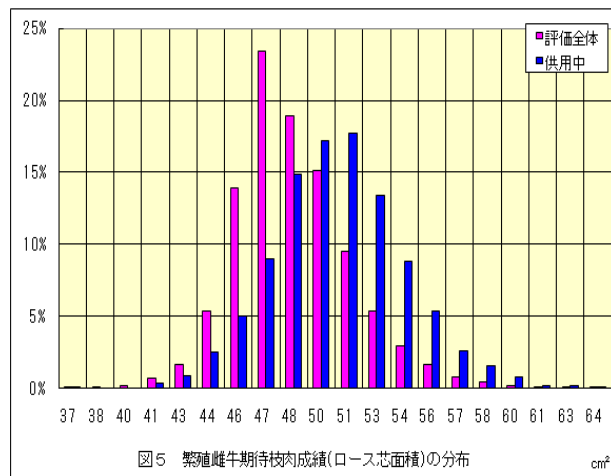
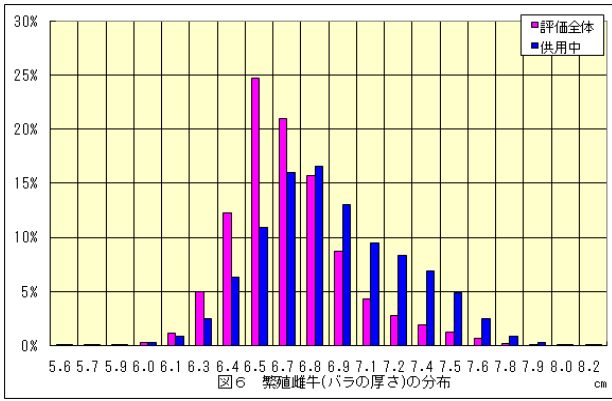


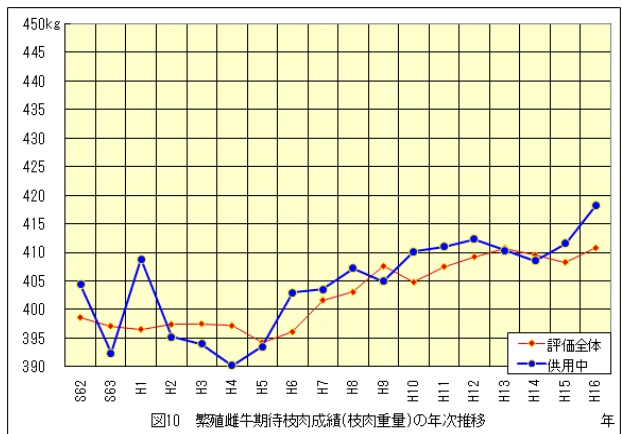
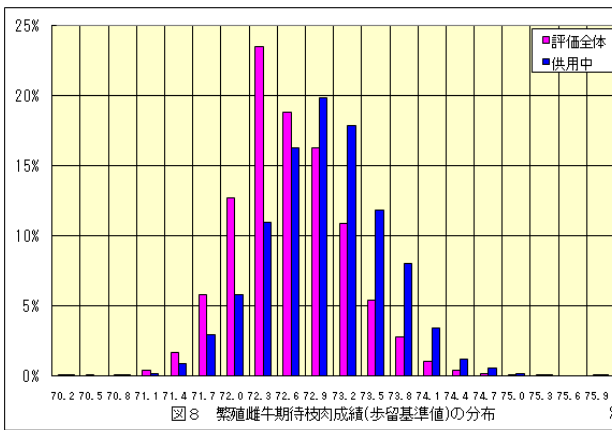
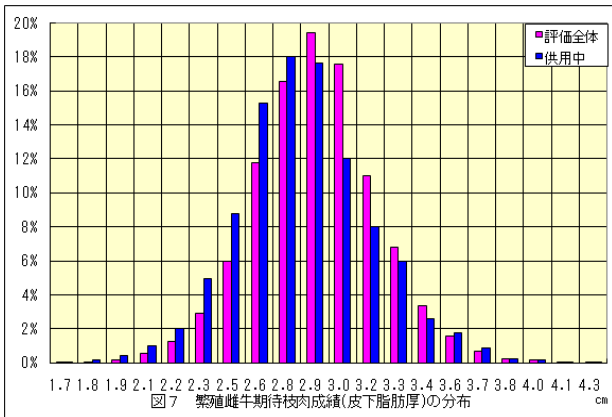
図5 繁殖雌牛期待枝肉成績(ロース芯面積)の分布

(2) 育種価から推定される繁殖雌牛の期待枝肉成績の分布状況



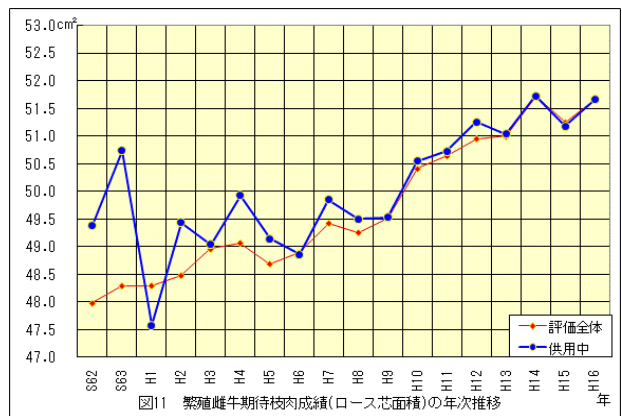
いずれの形質も順調に改良が進んでいる。特に、平成10年生まれ以降の繁殖雌牛の産肉能力は肉量、肉質ともに優れており、これは育種価に基づく保留手法の定着や現場後代検定による精度の高い種雄牛造成によるものとする。

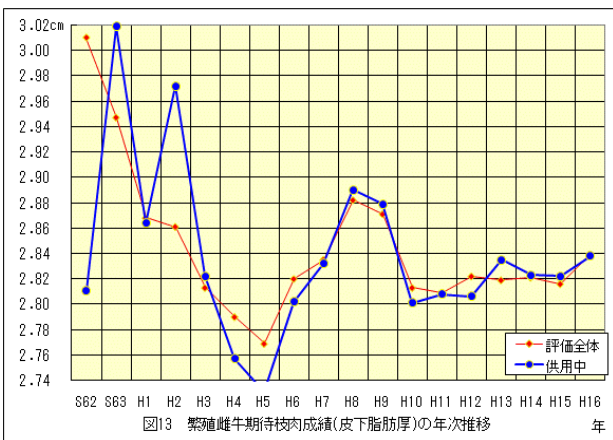
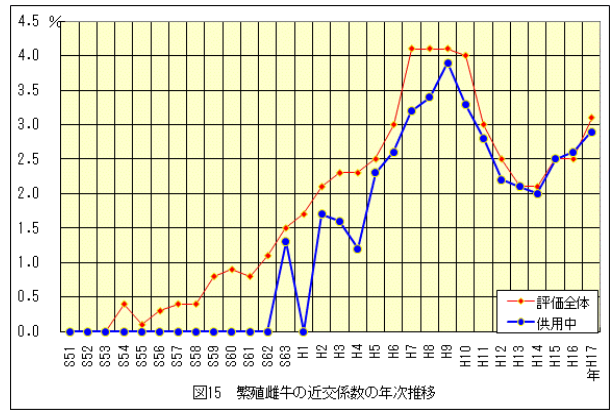
なお、平成元年～平成6年生まれ頃の繁殖雌牛の産肉能力は肉量、肉質ともに停滞傾向がみられるが、これは、同一種雄牛が集中的に交配され、多くの産子が保留されたことが一因と考えられる。



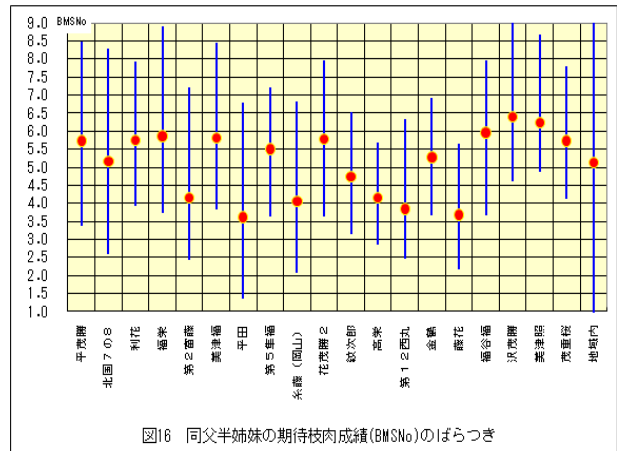
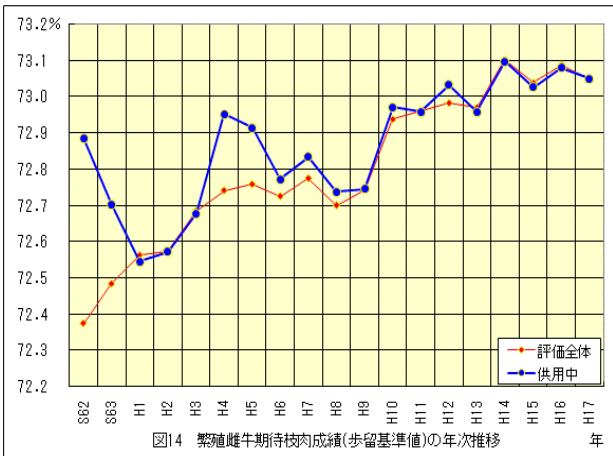
(3) 育種価から推定される繁殖雌牛の期待枝肉成績の遺伝的すう勢

各産肉形質が年次的にどの様に変化したか(遺伝的すう勢)をみるために、繁殖雌牛の生まれ年別に育種価から推定される繁殖雌牛の期待枝肉成績の平均値をグラフ上にプロットした(図9～14)。





(5) 同父半姉妹間の期待枝肉成績のばらつき
 育種価判明娘牛が多い同父牛の半姉妹の期待枝肉成績のばらつきを図 16、17 に示した。同一種雄牛でも娘牛の育種価には、かなりのばらつきが見られる。このことから後継牛の決定は、育種価に基づく選抜保留を行った後、第一子について枝肉データの収集を行い、育種価が判明したものから行うことが改良上重要であると考えられる。



(4) 近交係数の年次変化

繁殖雌牛の近交係数の年次変化を図 15 に示した。昭和 61 年生まれ以降、近交係数が徐々に増加し、平成 6 年生まれ以降急激に増加し平成 7 年から平成 9 年生まれの繁殖雌牛は 4% を越える高い水準となった。しかし、平成 10 年生まれ以降減少し、近年は 2% 前後で推移していたが、再び増加しつつある。これらの傾向は、優秀種雄牛の後継牛の利用によるものと考えられる。

